

# 2012年 植林ボランティアツアーレポート書

NPO法人 むさしの・多摩・ハバロフスク協会

# 「2012植林ボランティアツアーア in ハバロフスク」

報告者：福原 修

期 間 2012年4月30日(月)～5月7日(月)

日 程 ①成田（S7 568便）～ハバロフスク ②ナナイ地区（アニユイ  
養魚場見学 ③山火事現場での植林作業（ナナイ営林署管内）④太平  
洋国立大学（環境セミナー）、平和慰靈公苑（サクラの記念植樹）、在  
ハバロフスク日本総領事館主催セレモニー ⑤「友好の森Ⅱ」にて植  
林作業（ヘフツィール地区）～児童青少年センター（環境ポスター感  
謝状授与式）⑥ハバロフスク市内見学⑦大ヘフツィール自然保護区  
(野鳥観察会) ⑧日本人墓地へ墓参及び桜の植樹～ハバロフスク空港  
(S7 567便)～成田

参 加 者 安藤栄美理事長、本江一郎顧問、長島昭顧問、小林亮介理事  
他14名（男性8名・女性6名）以上18名

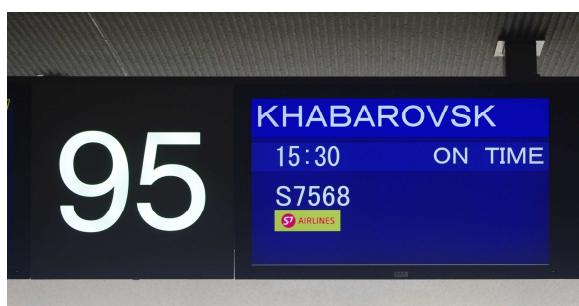
通 訳 オルロフ ウラジミール、  
コーディネーター チェルニコワ エレーナ

主 催 NPO法人 むさしの・多摩・ハバロフスク協会

【植林ボランティアツアーアの1日目】《4月30日(月)》



前回まではウラジオストク航空の利用であったが、諸事情によりシベリア航空に変更となり、それに伴い成田空港のターミナル第1から第2に変更になる。午後12時30分第2ターミナル3階JALABC宅配出発カウンター前に集合であるが、12時10分近くにそこに行くと既にたくさん的人が集合して雑談している。13時近くになるとチェックインが始まるが、荷物の重い人は重量制限で追加料金を徴収されるかどうか心配でざわめいている。チェックインの様子を見ているとシベリア航空は、スーツケースは無論のこと手荷物までも重量を量っている。この航空会社はここまでやるのかと驚く・・・・。しかし、手荷物は重量制限には加算していないようではっとする。チェックインが終わり手荷物検査・出国手続きと進むが、搭乗手続きには時間が早いので、出発ロビーでくつろいでいる人もいる。



搭乗口95番は、連絡モノレールに乗りしばらく歩くと搭乗口に着く。「Khabarovsk S7568 15:30」と案内標示されている。既にたくさんの人達がソファーに座って思い思に雑談している。ロシアの航空会社にしては珍しく搭

乗時間ちょうどに搭乗手続きが始まる。これも「びっくり」である。飛行機は、定刻に駐機場から滑走路までは行くが、ここでずいぶん待たされ、定刻より30分遅れで16時に無事離陸する。機上からはシベリアの大地が見えてくると参加者の殆ど的人は、窓から外を見ながら何か話している。ハバロフスクが見えてくると「わくわく」してくる自分が分かる。これからが楽しみである。ハバロフスク空港に20時ちょうど無事着陸すると機内から拍手が起こる。

入国手続きが始まるが、ソ連時代に比べれば改善されているが諸外国と比較するところまだである。これが「ロシアだ」と感じ、ロシアらしさの良いところかも知れない。荷物受取り場に行く。荷物を運んでくるターンテーブルが故障し参加者の荷物が揃うまで時間がかかる。22時30分宿舎に着く。部屋は参加者のうち2名は2階へ、他の人達は4階の部屋となる。大学の宿舎にしてはホテルのようにきれいである。聞くところによると、我々が予約しておいた2階の部屋は通信教育学生の宿泊研修の宿泊施設に使うため、今回は1部屋のみが割り当てられた。4階はゲストルームである。入口には「ガスニツツア」という看板が掲げられている。



### 【植林ボランティアツアーの2日目】《5月1日(火)》

朝5時30分に起きる。窓から空を見上げると雲が垂れ込め「どんより」した天気であるが、良い天気になることを祈る。8時玄関前に集合であるが、外は肌寒いので

羽織るもの一枚を羽織る。小林君は、日本語を長らく話していないかったようで、参加者の前で話すとき一瞬日本語が詰まったようである。皆が集合したので宿舎から歩いて5分くらいのところにあるカフェ（日本で言う喫茶店のセルフサービス版）で朝食である。どのように食べ物を食べ、どのように取ればよいか分からないのでロシア人の様子を見ながら取ることにする。精算はレジで行うが支払いはツアーレートに含まれているので支払い不要と小林君に言

われる。自分の好きなものが食べられるので、美味しい食べられる。

食事が終わり外に出ると、今日はメーデーなので広場にはたくさん若者が集まっているので異様に感じる。10時に玄関前集合で17人はすぐ集まったが、あと一人がなかなか来ない。いらっしゃるが顔に出さないよう堪えることにする。

しばらくするとその人がやって来る。これからの予定があるのですぐ出発する。マイクロバスはスピードを上げながら走っていると天気は、だんだん雲が切れて良い天



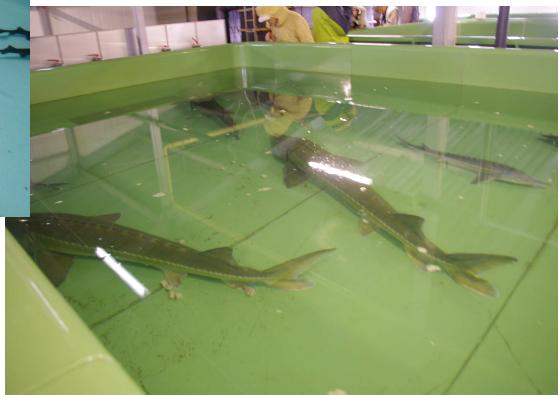
気に向かっているのが分かる。途中野鳥が生息する湖でバードウォッキングしながら2時間強走るとマヤクに12時30分到着し、昼食を兼ねて休憩である。食事場所は、こじんまりしていて綺麗であるので安心する。食事内容も家庭的で良かった。

昼食後、バスはしばらく走るとアニュイ養魚場に到着した。養魚場に着くと所長ら3人が出迎える。早速、安藤理事長があいさつ後に所長自らの案内によりチョウザメの養殖の様子の説明を受ける。約3cm～1mのチョウザメが、それぞれの大きさ別に生簀で気持ちよく泳いでいる。キャビア



(チョウザメの卵)は国内法で輸出禁止なっているため、スーパー等で販売されているものは偽者であるのに買わないようにと説明される。続いて鮭の養魚場に案内される。

こここの生簀には何百万もの鮭が養殖されており、ここから逃げ出した鮭は大きくなるとこの生簀近くまで遡上してくると話された。見学後



に養殖に関する質疑がある。参加者の一人が所長に日本のタバコを1本差し出すと、それを味わうように美味しそうに吸っている。他の人に勧めると「身体に悪いから禁煙している」と言われ断られる。最後に所長ら3人と安藤理事長を中心に参加者全員で記念撮影をし、養魚場を去る。





一路バスはトロイツコエの宿舎に向かう途中、午前中に立ち寄った湖でバードウォッチングをするが、小雨が降り出して雲で辺りが暗くなってくる。それでもバスは30分ほど停車している。宿に着くころには小雨は上がっていいる。このドライブイン兼ホテルは、螺旋階段を3階まで上がるが、階段の高さや幅はそれぞれ異なっていて面白い

作りである。床は波打っており実に面白いホテルである。部屋に通されると広さはまざまずであるが、人が廊下を通るとミシミシと聞こえ、誰か人が来るのが分かり防犯には役立つ作りである。シャワー室もカーテン1枚で仕切られ、すぐにはお湯が出ない。実に思い出深いホテルである。バードウォッチングの好きな方々は、夕食まで時間があるので、早速バードウォッチングに出かける。夕食は中2階にあり、ロシア人といっしょのホールであるけれどもロシア人の普通の生活が見られ、これも面白い。

### 【植林ボランティアツアーの3日目】《5月2日(水)》

いつものように6時に起床し外を見ると快晴である。今日は我々の目的であるナナイ地区営林署管内の「植林ボランティア」である。参加者の皆さんには、集合時間になると作業着やハイキングをする服装等の出で立ちで長靴を履き、「張り切って植林をやろう」という意気込みが伝わってくる。天気も快晴で嬉しい。私も頑張らなくてはと思う。

宿舎を9時30分に出発しバスで行く途中に山火事の後があちこちに見ることが出来るので、急きよ写真を撮る。森林地帯や湿地帯を見ながら行くとハバロフスク地方政府森林管理局のボルトルシコ局長とデニソフ植林部長たちが途中まで出迎えてくれていた。昨年夏の緑の少年団国際交流でお世話になった方々である。そこから2台の車は少し走ると脇道に入り、バスはうねるように揺れながら森林地帯を行くと広大な原野が開けたのである。そこでバスは停車すると、既に営林署の職員が10名ほど手伝いに来ている姿がある。またハ



バロフスク地方の放送局が来て撮影しており、テレビの放映をするつもりでやって来ている。参加者のうち参加者の誰とも繋がりがなく「インターネット」でこの植林ボランティアを知り、初めて

参加した福原さんにテレビ局のインタビューをしてもらうことにしたと聞く。

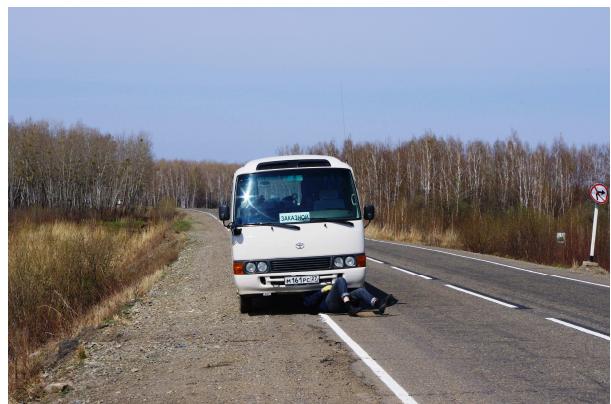
ハバロフスク地方政府森林管理局長のあいさつ後、安藤理事長のあいさつが行われる。その後参加者及び営林署長並びに営林署職員全員で「モスクワ郊外の夕べ」をロシア語でロシア人と一緒に合唱後に、皆で記念撮影を行う。署長から植林地の広さや何本を植林するかの話が行われる。それは植林しなければならない面積3万haのうち皆さんに本日植林していただく面積は、1ha即ち1万m<sup>2</sup>に3,000本のチョウセンゴヨウを30人ほどで植林するというのである。休憩用に東屋まで作られていたが、日本人は与えられた仕事を休憩することなく一生懸命働くが、ロシア人は少し働くとちょっと休憩する。日本人が一生懸命植林している姿を見てかどうか分からないけれども、ボルトルシコ局長は自ら我々に植林の仕方を指導するとともに、自らも植林を行っている姿に感銘を受ける。私は、さすが森林管理局長と思う。

植林が終わると参加者の皆さんとともに私も達成感を味わいながら植林したマツが、一日でも早く根付き、大きな松林の森林ができるのを祈りながらこの地を去ることになるが、来年も植林に来てシベリアが大きな「友好の森」になるよう頑張ろうと思う。初めて参加した私は、物足りなさを感じる。



バスは来た道を戻りながら途中アムール川のほとりのレストランで森林管理局長らと一緒に昼食を取る。デニソフ植林部長からお礼にお姉さまの手作りのドーナツ風お菓子を頂き、皆で食べる。和やかなうちに食事会は終わる。

その後はアムール川と支流の合流点近くの橋の近くで休憩しながら川面近くに下りてシベリアの澄み切った青空のもとでバードウォッチングやきれいな景色を堪能、また道端には日本の都会では見られなくなった「つくしんぼう」が生えているのをみて心が和む。バスのほうを見ると運転手が何やら車の下を覗き込んでいる姿が見える。するとタイヤがパンクしたらしく、ジャッキを持ち出しタイヤの交換をしているではないか。運転手がこれに気づかずバスを走らせていたら大惨事になったかもしれないと思うと背筋が寒くなる。しかし、ベテラン運転手のお陰で何事も無かつたようにバスは、スピードを上げて行く。



今後は、一路太平洋国立大学宿舎に向かうと思ったが、行きに立ち寄った湖の近くの国道の脇にバスを止めバードウォッチングである。天気も快晴でたくさんの鳥達を見る事ができて愛鳥家達は、早速、望遠鏡や望遠レンズ付一眼レフカメラを持って野鳥の観察に歓声をあげている。私も言われるままに望遠鏡を覗いてみると遠くの水辺で鳥達？がエサをついばむ様子が手に取るように見える。また肉眼で見えるところでビーバーのような動物が水面に顔を出したり潜ったりして、我々を歓迎しているようである。



ビクトル運転手が、電子辞書を引くと「マスクラット」であった。皆がバードウォッチングに満足したようなので、宿舎に向け出発する。



ロフスク郊外近くにやってくると、近くに人家があるにも関わらず野焼きか火事が分からぬけれども「火の手」が赤々と上がって燃えているのが見える。その道路脇には消防車が一台停車しているが、人の動きは見えない。

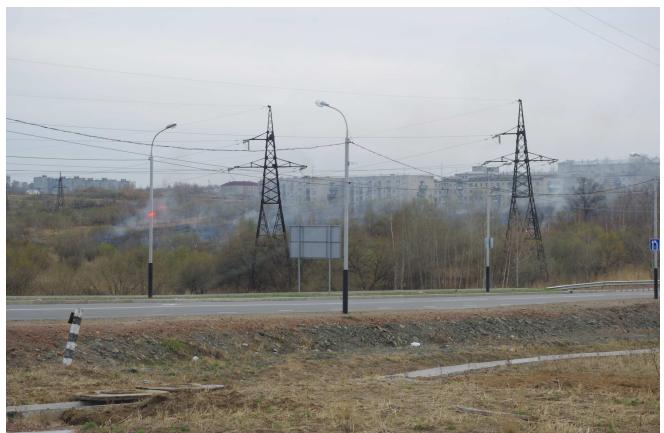
夕食は郊外のボーリング場内のレストランであるが、店の中に入ると薄暗く、まるで節電しているようである。お茶の時に皆さんのおつまみ代のつり銭を寄せ集めて「少ないけれども協会に寄付します。」と言われ、嬉しかったし、この仕事に携わっていて良かったと思う瞬間でもあると聞いた。

#### 【植林ボランティアツアーの4日目】《5月3日(木)》



今日も6時に起床する。窓から外を見ると雨が降っている。平和慰靈公苑の記念植樹のときは、晴れてもらいたいと祈るばかりであった。

朝食は近くのカフェへ行くが2回目であるので、皆も要領が分かって



いるのでスムースにことが進む。

太平洋国立大学にて「太平洋国立大学自然利用・環境学部」、「N P O 法人 むさしの・多摩・ハバロフスク協会」共催による「環境セミナー」が行われる日である。午前9時30分に玄関前に集合し、小林君の案内により大学の講義室へ行く。セミナー開始5分前になんでも大学側3名、当協会4名、参加者14名と数名の学生しか着席していない。だが定刻になると学生は25名になる。当該大学第一副学長のあいさつに続いて、当協会の安藤理事長からの挨拶の後、森林公園産業学科長 ヴィヴォドツエフN. V先生による「アムールトラの保存の方法であるチョセンゴヨウ林の復活」についての講演に続いて、太平洋国立大学大学院博士課程3年 小林亮介氏による「植裁されたチョウセンゴヨウの生長」についての研究発表。続いて当協会顧問である本江一郎氏による「森の主？ –ボルネオ島 東カリマンタン州においてー」についての講演、最後に慶應義塾大学名誉教授で同じく当協会顧問である長島昭氏による「美しい日本の自然と地震・津波・原発事故」について講演される。講演後にロシア人から活発な質疑があり成功裏にセミナーが終わる。

セミナー後に大学食堂において、6～8人テーブルに、セミナーに出席したロシア人学生と我々日本人が一緒にテーブルに座り昼食をしながら、露和・和露辞典や電子辞書を用いての会話あるいは英語やカタコトの日本語を使っての談笑が楽しそうに聞こえてくる。何人かは写真をお互い取り合い、メール交換をしている方もいるようである。このような企画は、ロシア人と日本人の相互信頼や親睦交流に役立ったと確信する。大学を出るころには雨は、上がっており薄日が差しており嬉しかった。午後3時から「シベリア平和慰靈公苑」にて日本から持ってきた「エゾヤマザクラ」の記念植樹が行われるので、それまで小休憩である。植樹を行う関係上作業着の



まま午後2時30分宿舎を出発する。

午後3時少し前に平和慰靈公苑に着くと、すでに在ハバロフスク日本総領事 高橋氏と職員2名が待機している。天気は快晴になる。また、市内の放送局が何社かやって来て撮影の準備をしている。

記念植樹を行う前に記念式典が行われる。初めに安藤理事長より、今回に至った経緯が話され、高橋ハバロフスク日本総領事からロシア語(有井領事館職員による通



訳）で挨拶が行われた後、太平洋大学における日本庭園設計コンクールの入賞者の表彰が行われる。その後に、参加者全員にサクラの花柄模様の扇子を渡し、日本の歌「さくらさくら」を日本語とロシア語で交互に合唱する。

いよいよ「サクラの苗50本」の記念植樹が始まる。すでに平和祈念モニュメントの周りには、植樹する場所に目印が施されているので、その場所にロシアのスコップで穴を掘ろうとするが約10cmまでしかスコップが入らない。それ以上は地面が硬いので足で力強く踏みつけ掘ろうとするが、スコップは容易に入らない。良く見ると大きな石や瓦礫の層が厚くなっている、たかが30cmであるがなかなか穴は掘れない。それでも穴の場所を変えながら何とか50本を植えることが出来て、ほっとする。無事に記念植樹は終わる。

総領事館主催のパーティが総領事公邸で行われるので、皆は宿舎に戻り、男性は作業着からスーツと革靴に衣装を変え、女性はドレスなどに着替えてくる。時間がないため着替えるとすぐに宿舎を出発する。総領事館公邸は市内の中心にある。公邸に入るとき場には天皇皇后両陛下の写真が飾られており、右側には日本国旗が置かれている。このような席に招かれたことのある参加者は、殆どいないと思われる。総領事のあいさつからパーティが行われると考えていたが、総領事はそのような固い話は止めて一言「先ほどはお疲れ様でした」と言い、立食パーティが始まる。総領事を初め職員は、たくさんの参加者を接待するのは大変そうであるが、楽しく和やかなうちにパーティは終わる。

ロシア側の参加者は、太平洋大学学長・建設学部長（女性）・ニコライ先生（リヤブヒン学部長代行）・ボルトルシコ森林管理局長・デニソフ植林部長・スピリドノフ大ヘフィツル自然保護区所長である。イワノワ国際交流局長とロイトマン交流協会代表は所用がありパーティーには欠席だった。

### 【植林ボランティアツアーの5日目】《5月4日(金)》

今日は午前5時40分に起きる。天気は快晴。今日から3泊4日でソスノフカの研修施設の宿舎へ移動である。荷物を片付け、作業のできる服装でバスに乗り込む。小1時間で宿舎に着くと朝食が用意されていた。休憩の後、10時30分に宿舎を出発し30分余りで「友好の森II」に着くと、すでに営林署長や太平洋大学の学生が集合場所に集まっている。

「友好の森II」の碑の前で植林を行うにあたりセレモニーとして安藤理事長のあいさつに続いて、シェロガエフ営林署長のあいさつ、そして全員で「さくらさくら」を合唱し後、記念撮影を行う。



植林の場所は、ここから10分ほど歩いたところで、営林署の職員さんたちが、すでに準備を整えてくれていた。そこには、植林の箇所の目印として杭が打ち込まれてあり、チョウセンゴヨウの苗が一束50本で20束ぐらい置いてある。

学生と組になって苗を植えるのであるが、初めのうちは息がなかなか合わないけれども、お互い要領が分かり植林はスムースに出来るようになる。終わり近くになり津和野で買って来た民芸品を2人にそっと渡すと、こっそりそれを見て右手の親指を立てて「ハラショー」「スパシーヴァ」とお礼を言っている。植林が終わり、帰り道で



2009年と2010年に植林したマツが、どの位まで大きくなったか写真を撮る。途中小高い山に登ると森林地帯が広がっておりシベリア鉄道の線路が見え、眺めが良いので、ここでゆっくり休憩したいくらいである。

昼食は植林を手伝ってくれたロシア人学生と我々とで意見交換会というか交流会の場である。この昼食会は、ロシア人と日本人の交流会の目的と感謝の気持ちを伝えるために行い、成功裏にで

きたと思う。この席で学生の引率のビクトル先生に祭りの「はんてんと手ぬぐい」をプレゼントする。また学生には、「藤娘・こま・歌舞伎等のしおり」「携帯用灰皿」「民芸品の携帯ストラップ」をお礼として渡す。



この日の最後のイベントは、児童青少年センターを訪れて「環境ポスター」感謝状授与式を行うことである。このポスターは、日本で展示するためハバロフスク市内の児童生徒に「環境ポスター」を書いていただいたものである。授与式の前に集まった児童の代表が詩の朗読、ダンス、歌を歌うなどの披露をしてくれる。拍手喝采である。

感謝状授与式後に「手作りのトンボ」を飛ばして見せたりする。最後に協会から「しおり」を児童全員に贈る。帰りにセンターの入口付近に「ХАБАРОВСКИЕ Вести」という新聞に、昨日「平和慰靈公苑」で行われたサクラの記念植樹の記事が掲載されているのを見る。そしてここには、ラジオ局の記者が取材に来ていた。



## 【植林ボランティアツアーの6日目】《5月5日(土)》

今日は一日グループに分かれて市内見学であるが、昨日までよい天気が続いたのに朝から雨で残念である。宿舎を出発してインツーリストホテルに着く頃には大雨である。バードウォッチングのメンバーの代表3名は、明日の野鳥観察会の下見に行く。



36年ぶりにハバロフスクを訪れるので、音信不通になっている人（名前はカザン・アラ）を探して欲しいと安藤理事長に依頼する。その後、ハバロフスク在住の小林君から1ヶ月半あまりすると「その人を探すことができました」と言う連絡が届いた。今日午前11時にインツーリストホテルで彼女と会うことになっているのである。11時少し前にホテルに到着しロビーを見渡しても彼女の姿が見えないが、すぐに彼女がやって来て36年ぶりの再会は実現する。彼女が言うには「手紙を書いたが戻ってきててしまった。また1986年に日本へ船で宿泊しながら観光で行った。」と話している。小林君が言うには「見つかったのは、奇跡！」であると・・・幸いにも、まだシベリア鉄道の車掌を続けていたので、見つかったようである。あいにくの大霖の降る中を皆と一緒に市内観光にでる。

今夜は、インツーリストホテルで参加者全員に彼女も交えての夕食会であるが、皆さんには、彼女との経緯を話してあるので夕食会時にはテーブルの中心に座っていただき、一言あいさつをお願いしたところ、そのようなことを事前に話していなかつたので「びっくりと緊張」で紹介されても会釈するのが精一杯のようであった。通訳として小林君の友人のルイジコフ・エフゲニー君(愛称ジェイ君)をお願いしたので、彼女は緊張がほぐれてきたように見えて安心する。翌日は、アムール川遊覧船に乗るので「彼女と一緒に乗らないか」と誘うと行きますと・・・。結局、今日は一日大雨であった。明日は天気になるように祈る。

## 【植林ボランティアツアーの7日目】《5月6日(日)》

祈りも空しく今日も雨である。近くの大ヘツィール自然保護区の野鳥を現地の小



・中学生等約20名と一緒に野鳥観察会を行う。その場所はバスですぐであるので、出発を午前10時にする。ビチーハの保護区事務所に到着すると雨の中、スピリドノフ所長が出迎えてくれる。

事務所に入ると職員や子ども達がすでに待っている。早速、所長のあいさつに続いて、安藤理事長があいさつ後に、所長自ら大ヘフツィール自然保護区についての説明をして下さった。それから野鳥や小動物の標本が陳列してある小博物館に案内され、皆は細かく標本を見ながら職員に色々と質問している光景が見られる。

しばらくしてから、日本野鳥の会茨城支部長の池野さんから「日露の鳥の共通点と

違い」についての学習会がパワー・ポイントを使って行われる。ロシアの子ども達は、ここで勉強していることもあり、クイズを出しても正解が多く、また多くの質問が出され、池野さんも驚いている姿が伺える。学習会が終わると小雨が降っているけれども、屋外に出て双眼鏡をセットし、実際に子ども達に双眼鏡を覗いてもらうと「野鳥が目で見るより大きくはっきり見える」ので、嬉しい顔をしながら代わるがわる望遠鏡を覗き、また覗き、楽しそうにしている様子が伝わってくる。

雨は小降りになったり大雨になったりするが、子ども達は、野鳥を見ることに夢中になってしまっており雨など全く気にしないようである。同じ鳥ばかり見ても仕方が無いので、車に分乗し森の奥に行くと池野さんも見たことの無い野鳥が木々に止まり、また鳥の鳴き声が時々聞こえ、皆も夢中になってセットされた望遠鏡を覗きこんでいる。大粒の雨が降り道路もぬかり肌寒いけれども、珍しい鳥が観察できたことと子ども達が喜んでいる姿を見ることができたことで、この観察会が成功裏に終わることができたと確信する。

その後場所を変えて、子供達と皆でレストランにおいて楽しい昼食会である。席は子供達と別々であるが和やかに行われ、料理はインツーリストのナターシャの取り計らいによりウズベキスタン料理が振舞われ、ロシアの料理とも違い、皆美味しく頂いたようである。(ここはナターシャの父上のストルビコフ氏の経営するカフェである。)談笑している合間にカメラを向けると子供達は、手を振ったり、おどけたり嬉しそうな顔をしている。また協会から子供達に「おみくじ」のお土産を贈り、安藤理事長がその説明をすると、早速、おみくじを振つてみて「大吉、小吉」が出ると喜んでうれしい顔をしているので良く分かる。



雨は小雨に変わっている。遊覧船に乗る時間が迫ってきたので、アムール川乗船場へ向かうけれども、遊覧船は見当たらない。オルロフさんが近くの観光案内所で聞いてくると「遊覧船が就航している」という情報は、誤報であるとわかる。(ダーチャ行きの定期便のみが就航していたが、片道3時間であるという。)

その後、第1期植林現場であるワロニシ地区に向かい、「チョウセンゴヨウの生長」の様子を見に行ってみると、マツは、大きく生長しており一安心する。



しかし、昨年の夏の緑の少年団国際交流で子どもたちが記念植樹をした「チョウセンゴヨウ」は、枯葉や雑草に埋もれていて探すのが簡単ではなかったが、安藤理事長、本江氏、小林氏、私と4人で、やっと目印の小さな杭のそばに20cmほどに生長している「小さなマツ5本」が確認できた。マツの周りにある枯葉を除き、大きな木の枝を払い、太陽の光が差し込むように手入れを行う。来年のこの時期にやって来る時には、もう少し生長していると思う。

また、2007年(第10次)に植林を行った

マツは大きいもので1m70cm以上に生長しているのに驚く。雨も小降りになってきているが宿舎に帰るのは早すぎるので、皆の希望を聞くと「スーパーに行きたい」という要望があったので、郊外にある大きなスーパーに行くことにする。大型スーパーらしく駐車場は満車状態である。店内は思ったほど混雑していないが、レジでは日本の3倍もある大きなカートにいっぱい買う品物が入っているためか?精算に時間がかかり長蛇の列である。皆はこれがロシアでの最後の買い物になると思い、ウォッカ・ビール・チョコレート・菓子等をたくさんの土産を買っている。



今夜は、このボランティアツアーの最後の夜なので、宿舎における夕食の内容もちょっと豪華にし、協会からウォッカをサービスする。ハムやサキイカ・乾燥タコ・ナッツに「カラマツのジュース」なども用意され、夕食会は盛り上がる。ただし、ジュースは、カラマツではなく、シラカバとリンゴの混合ジュースであった。通訳のジェイ君の勘違いであった。

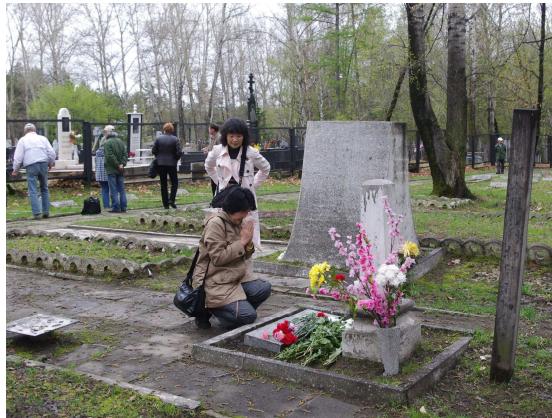


## 【植林ボランティアツアーの8日目】《5月7日(月)》

いよいよロシアを離れる日である。目が覚めるとどういう訳か今日も朝から小雨が降っているが、日本人墓地でサクラの植樹を行うので雨が降らないことを願う。宿舎を出発する頃には雨が上がる。

いつもより早く出発し日本人墓地に着くと、天気もまづまづであり一安心する。正門前でお墓に供えるため花を買う。慰靈碑には造花

が供



えてあるが、我々は買った生花を供えてお線香を上げる。その後サクラの植樹を小林君と本江先生に準備していただいた後に、安藤理事長が植樹を行う。続いて小林君と本江先生が植樹を行うが、他の人達は、お墓を回り、手を合わせている。最後に慰靈碑に安藤理事長と小林君と私とで手を合わせる。

墓参が終わりハバロフスク空港に向かう。

チェックインには少し早かったが、手荷物とスーツケースのエックス線検査が行われているので、時間が早いが検査を受ける。皆の荷物検査が終わると次は出国審査であるが、Eチケットの配布と注意事項を話しているとアラさんが見送りに来てくれた！今日は一昨日と違いリラックスしている様子が伺える。

皆が再度の手荷物及び出国検査が終わるのを見届けてから出発ロビーに向かう。ここでの重量超過料金は、1kgごとに約200ルーブルと聞く。

S7 567便は定刻14時（ロシア時間）に離陸し、成田に定刻通り無事着陸する。ターンテーブルで皆が荷物を受取り終えてから簡単な解散式を行う。安藤理事長は、一人ひとりにこの植林ボランティアに参加して頂いたお礼を述べて、今後の協会の支援をお願いしていた。

当初、余ったルーブルなどを緑の募金として集めていたが、皆の意見で、協会への寄付のほうが良いということになり、約1万2千円ほどが集まった。

